

## 七曜日における 伝統から近代への軌跡

徐 克偉  
(関西大学)

要旨：平安時代、漢訳仏典の輸入に伴い、七曜日という概念が中国から日本へ伝えられたことは夙に明らかであるが、ほとんどの学者はそれをただ吉凶の判断をするための暦注の一種として扱い、近代の時間概念ではないと主張する。一方、近世以降、西洋文明を受容した際、特に蘭学の展開期において、東西暦学に関する概念の融合が認められる。時間単位の一つとしての七曜日が、日本でどのように形成されたのかは未だ不明である。正式に導入されたのは明治期であるが、単純な時間の概念や語彙の成立は蘭学時代であると考えられる。多数の蘭学者の努力により、伝統的な概念が次第に占星、宗教などの要素から分離し、近代的な暦の概念として普及するようになった。本稿では蘭学資料を中心として、七曜日における伝統から近代への転化過程を探り、その軌跡を明らかにしたい。

キーワード：七曜日、伝統、近代、蘭学

## はじめに

今日の日本で普及している七曜日という時間単位はいつ頃現れたのか、という問いに明確に答えるのは難しいであろう。たとえば、『大漢和辞典』（縮写版、巻一）の「七曜日」の項には、「猶太教・基督教に於ける暦の一週の名」と記されており、古代日本においても、「七曜御暦」という暦法が使用されていたことが知られる。また、「七曜」の項では、「七曜日」と同じ意味項目の他に、「日（太陽）・月（太陰）と、火（熒惑）・水（辰星）・木（歳星）・金（太白）・土（填星・鎮星）の五星とをいふ<sup>1</sup>」ともあり、『素問』『天元紀大論』をはじめ、様々な中国の文献を援引している。ユダヤ教・キリスト教の暦法概念や中国の天文学用語が日本で如何に融合し、遍く使用されるようになったのかは、興味深い問題であると思われる。

## 1 先行研究

従来の研究で明らかにされているように、今日、我々の知る七曜日は、元来、土曜日から始まるヘレニズム時代の占星術に由来する惑星に関連する週（week）、さらに日曜日から始まるユダヤ教・キリスト教における週の、概念的に異なる二つの周期が混同されたものであるという<sup>2</sup>。後者は番号付き紀日（一から六までの労働する六日間と七日目の安息日）であり、『旧約聖書』『創世紀』（*King James Version* 1: 1-2: 4）に見られる。一方、前者は元々バビロニアの占星術であり、エジプトで紀日法（後述）となり、西はローマ、東はインド、中国へ伝えられた<sup>3</sup>。漢晋の際、七曜暦、即ち、七曜の紀日法が中国に伝来<sup>4</sup>あ

るいは成立<sup>5</sup>したそうである。8世紀頃には、その概念や暦法が日本に伝来し、18世紀の後半まで断続的に利用されていた<sup>6</sup>。

江戸時代に近代の西洋文化を直接受容するようになると、紀日法としての七曜日も取り入れられた。この問題について、『日本国語辞典』（第二版、巻六）に江戸初期の一例が示されている。それは『日葡辞書』（1603-04）に見る「七曜」という言葉である。また、江戸後期の蘭学者吉雄俊蔵（1787-1843）が著した『遠西観象図説』（1823）という蘭学作品が挙げられ、従来使用されてきた七曜、七曜日及びその各曜（日）の用例が記されている。関連資料を調べると、前作の記録は非常に簡略であり、「Xichiyò. Nanatçuno foxi. Húas sete estrelas que estam iunto ao Norte」（七曜。七つの星。北極星のそばにある七つの星）とされ、意味も異なる<sup>7</sup>。『遠西観象図説』はこの問題を論じた資料の中では、さほど古い文献ではない。

内田は日本語の曜日名について、英語との意味対応はなく、五行説によって付けられた惑星名をそれぞれの日に対応させたものであると考えていた<sup>8</sup>。しかし、七曜日の訳語は英語をもとに作られたものではなく、遠藤が指摘したように『波留麻和解』（1796）などの蘭学文献に存在するものである<sup>9</sup>。残念ながら、遠藤の研究は『御堂関白記』のような伝統的資料を検討し、翻訳の理由を追究する姿勢は見られない。また、蘭学者の考察について、吉野は主に本木良永（1735-1794）の『新制天地二球用法記』（1792）、前野良沢（1723-1803）の『七曜直日考』（1792）及び吉雄俊蔵の『遠西観象図説』などの蘭学資料を分析し、七曜日及び各名称が当時如何に翻訳されたか、詳しく論じた<sup>10</sup>。但し、より早く成立した『天地二球用法記』

<sup>5</sup> 刘世楷（1959）。「七曜历的起源—中国天文学史上的一个问题」、《北京师范大学学报》（自然科学版）、No. 04、27-39頁。

<sup>6</sup> 羽田亨（1931）。「西域文明史概論」、東京：弘文堂書房、180-182頁；竹田龍兒（1942）。「曆学史」、長坂金雄編『日本科学史』（新講大日本史第19巻）、東京：雄山閣、63、65-66頁；内田正男（1986）。「曆と時の事典」、東京：雄山閣、122-125頁。

<sup>7</sup> 勉誠（2013）。「キリシタン版日葡辞書」（カラー影印版）、東京：勉誠出版、611頁；土井忠生、森田武、長南実編訳（1980）。「邦訳日葡辞書」、東京：岩波書店、761頁。

<sup>8</sup> 内田正男『曆と時の事典』、132頁。

<sup>9</sup> 遠藤智比（1989）。「七曜の訳語考」、『英学史研究』、No. 21、169-184頁。

<sup>10</sup> 吉野政治（2015）。「蘭書訳述語考」、大阪：和泉書院、108-130頁。

<sup>1</sup> 古代の考え方では、日も月も惑星であると思われる。

<sup>2</sup> リオフランク・ホルフォード・ストレブズ著、正宗聡訳（2013）『暦と時間の歴史』、東京：丸善出版株式会社、101頁。

<sup>3</sup> 同上、101-106頁。

<sup>4</sup> 葉德祿（1942）。「七曜暦輸入中國考」、『輔仁學誌』第十一卷（第一第二合期）、137-157頁。葉の前に、唐の時代において伝来されたという主張もある。Chavannes, Mm. Éd. et Pelliot, P. (1913). Un traité manichéen retrouvé en Chine, traduit et annoté (Deuxième partie), *Journal Asiatique* (Janvier-Février), pp. 158-177.

(1774) やオランダ語の原文などの関連資料を利用しておらず、見落としは少なくないと考えられる。

総合的に見れば、七曜日についての研究は多く、様々な成果を挙げているが、一体、その概念はどのように伝統から近代へと転化されたのかについては未だ不詳である。よって、本稿では、この転化過程を中心に、近代知識と伝統文化との繋がりを検討したい。明治以前における七曜日の確立は主に宗教、天文学、語誌など三方面からなると考えられる<sup>11</sup>。従って、以下に歴史の流れに沿って、それぞれを検討してみる。

## 2 キリスト教の要素と排除

近世以降、いつ日本に七曜日が導入されたのかは明確ではないが、16世紀末、イエズス会によって編纂・出版されたラテン語・ポルトガル語・日本語辞典『羅葡日対訳辞書』にすでに以下の記載が見られる。

Hébdomas, adis, l, Hebdómada, ae. Lus. Somana. Iap. <sup>ママ</sup>lxichinichi, l, nanuca.<sup>12</sup>

ここでは、ラテン語「Hébdomas」(主格、「Hébdomadis」は属格)、「Hebdómada, ae」(「七つ、七日」という意味であり、古典ギリシャ語「ἑβδομας、七」に由来する)及び対応するポルトガル語「Somana」(「Lus.」、即ち「Lusiada」=英語 Lusitanian、ポルトガル語)を日本語で「七日」(xichinichi, nanuca)と翻訳している。

この総称のみならず、毎日の名称もあり(具体的な訳名は本文4.1節に譲る)、日曜日から土曜日の順に、ラテン語、ポルトガル語及び日本語

<sup>11</sup> ここでは主に明治以前のことを検討し、明治初期の資料を数件利用するが、考察の重点ではない。明治以降の状況及び日中の交流について、松村明や内田慶市の論著を参照。松村明(2009)。「明治初年における曜日の呼称」、近代語学会編「近代語研究」(第十集)、東京：武蔵野書院、509-529頁；内田慶市(2010)、『文化交渉会と言語接触：中国言語学における周縁からのアプローチ』、大阪：関西大学出版部、189-203頁。

<sup>12</sup> 勉誠(1979)、『羅葡日対訳辞書』、東京：勉誠社、326頁。

名が並べられている。日本語名はキリスト教に因んだポルトガル語に由来しており、主の日(Domingo)、第二(Segunda)～六(Sexta)の日及び安息日(Sabbado)をそれぞれ原語或いは語幹の後に、「no fi」(「の日」、「feira」は日という意味)を付けただけの訳語である<sup>13</sup>。即ち、これらの語彙はキリスト教のものとして、日本へ取り入れられたと考えられる。

しかし、禁教や鎖国などの政策のために、それ以降の日本は長期間、オランダ以外のヨーロッパ国家との交流が中断された。『羅葡日対訳辞書』は天草で出版されたが、日本には現存しておらず、広く流布しなかったと思われる。

ところが、オランダとの交流が発展するに伴い、日本人学者の間で蘭学という学術運動が起こり、積極的に西洋文化を受容する動きが見られるようになる。この流れの中で七曜日も再び西洋から受容されていく。但し、キリスト教に関連する要素は人為的に排除されたようである。

オランダ語文献を通じ、最も早く七曜日に触れた日本人学者の一人、江戸蘭学の開創者とされる前野良沢は、『七曜直日考』<sup>14</sup>という訳文の中で天文学の起源説を忠実に翻訳した。しかしユダヤ教に関する部分では、「先師<sup>モワセス</sup>謨<sup>アダム</sup>設思」、「亞<sup>アダム</sup>潭(人ノ始)」などを翻訳・解説したが、「神の天地創造が七曜の起源」という最も基本的な部分を翻訳しなかった<sup>15</sup>。これは禁教という背景の下で、訳者が取捨選択することでキリスト教の示唆を排除し、七曜日の知識を受容・伝達していたと考えられる。

その後、長きにわたり宗教的要素は見出しがたい。筆者の蒐集した資料によると、幕末に来日した米国人宣教師ヘボン(漢文名平文、James Curtis Hepburn, 1815-1911)によって編纂された辞書『和英語林集成』に至って、「Ansoku-nichi」(安息日)、「yaszmi-bi」(休み日)のような宗教に因んだ言い方が英語の「Sunday」と再び対応したと見られる<sup>16</sup>。し

<sup>13</sup> 遠藤智比「七曜の訳語考」、175-176頁の論述を参照。

<sup>14</sup> 写本、早稲田大学図書館所蔵、『金石品目』などの作品との合綴本である。大分県に校注版がある。大分県立先哲資料館(2009)、『前野良沢資料集』(第二巻)、大分：大分県教育委員会、302-305頁。

<sup>15</sup> 大分県立先哲資料館『前野良沢資料集』(第二巻)、302頁。

<sup>16</sup> 平文(1867)、『和英語林集成』「英和の部」、上海：美華書院、110頁。明治大学図書館の『デジタル和英語林集成』を参照、以下同じ。

かし、それは遅いものであり、また、該項には「dontaku」(ドンタク)<sup>17</sup>という訳語も見られることから、蘭学の影響がより強いと言える。

簡単に言えば、七曜日におけるキリスト教の要素は最初に日本にもたらされたが、禁教などの制限によって、排除されたと思われる。

### 3 天文学方面について

江戸時代以降、最初に天文学の視点から西洋の七曜日の概念に触れた日本人は天文学の専門家ではなく、オランダ通詞の本木良永、蘭学者前野良沢などの学者である。1820年代以降によく吉雄俊蔵のような専門家が登場する。

#### 3.1 本木良永の『天地二球用法』と『新制天地二球用法記』

本木良永は最も早く西洋の七曜日を取り入れた日本人学者であろう。但し、吉野の論じた『新制天地二球用法記』(1792年、全称『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』、以下『新制』と略す)の前に、安永三年(1774)に成立した『天地二球用法』においても良永は既にこの問題に触れている。類似したタイトルであるが、前作はブラウ(Willem Janszoon Blaeu, 1571-1638)のオランダ語作品<sup>18</sup>から翻訳され、『新制』は1791年11月から翌年3月頃にかけて<sup>19</sup>、イギリス人George Adams(1709-1772)の天文学著述をオランダ語訳<sup>20</sup>から編訳した。ここでは両作品に関連する内容を検討してみる。

『天地二球用法』には、

往昔、ヨード人、厄勒祭巫人、邏馬人ハ今吾等和蘭人ノ用ル時配<sup>クバリ</sup>ノ外

<sup>17</sup> オランダ語「Zondag」の訛りであると思われる。

<sup>18</sup> Blaeu, Willem I. (1666). *Tweevoudigh Onderwijs van de Hemelsche en Aerdsche Globen*, Amsterdam: Joan Blaeu.

<sup>19</sup> 三枝博音編(1936)。『天文・物理學家の自然観』(日本哲學全書 第八卷)、東京: 第一書房、207頁。

<sup>20</sup> Adams, George. (1766). *A Treatise Describing the Construction*, London: George Adams; Ploss van Amstel, Jacob. (Trans.)(1770). *Gronden der Starrenkunde*, Amsterdam: Kornelis van Tongerlo.

ニ、別ノ時配ヲ用シナリ。(中略) 往昔ノ人七曜ヲ每一時ニ配当スルカ、故ナリ一曜一曜其名ヲ命授するト、毎日出ノ初一時ヨリ始マリ、君主護アルガ如シ。其故ハ七日ノ第一日ヲ日曜ノ名ニ因テゾシ ダクト名ケ(此ニ日曜日ト譯ス)(中略) 第七日ヲサテユル ダクト名ケ(此ニ土曜日ト譯ス) 第二ノ一時ハ七曜ノ順ニ應シテ、漸々ニ此餘ノ時々ハ何レノ七曜晝夜共ニ主護シ玉フヤ。是ヲ知ント欲セハ、唯彼順ニ監フベキトアリ。此下ノ円形(図略)ノ順ニミセシムルが如ク。其順ハ土曜、木曜、火曜、日曜、金曜、水曜、月曜ナリ。此下ニ記録スル七曜、其日ノ初一時ヲ主護シ玉フナリ。彼方ヨリ円形ヲ右旋ニ每一時ニ一曜査ル寸ハ何レノ七曜何時ヲ主護シ玉フト、其順ニ当ルベシ<sup>21</sup>。(後略)

との訳文があり、七曜日の起源を紹介している。引用文によると、七曜日は、元々、「往昔ノ人」の紀時の手段であった。即ち、地球から遠い順に、土、木、火、日、金、水、月の七曜が、一時間ずつ支配するということである。その上で、毎日の「日出ノ初一時」に当たるある曜がその日も支配すると考え始め、土、日、月、火、水、木、金の順としての紀日法が現れてきた。

訳文には「往昔ノ人」とは、即ち、ユダヤ(「ヨード」)人、ギリシャ(「厄勒祭巫」)人、ローマ(「邏馬」)人などを言い、前文(「1 先行研究」)で論じたユダヤ教・キリスト教とヘレニズム時代の占星術からの異なる二つの概念の融合に触れる。したがって、土曜日のかわりに、日曜日は毎週の第一日とみなされるようになった。

『新制』では七曜日のことも論及している。

此の學、人事男女の吉凶禍福貧富、星に因りて占ひ、一歳、和蘭曆面の三百六十五日の日々に七曜を配して、一七日毎に日月火水木金土の順列を以て七曜の日を建て、一歳の日數に合わせ(中略)此の一晝夜二十四時を七曜の時といひて毎二十四時に七曜を配當す。其の七曜の

<sup>21</sup> 写本、国立国会図書館所蔵、第四十七「七曜時ト名ル不同時ヲ以テ晝夜ノ時分ヲシル術」。句読点は筆者による。\_は原語の傍線を示す。

廻りの順列は日金水月土木火と順を建てて、太陽日の朝の六時に太陽を當て、その日を太陽日といひ（中略）生れし人の賢智愚不肖聰慧遲鈍の優劣を考へ、男女の吉凶禍福貧富民病の生死壽夭人相手相を考へ占ふの類皆是れ和蘭に所謂の天學語<sup>アストロローシヤ</sup>葛數鐸綠羅拭葛和蘭語<sup>スタルレホールセクケキユンデ</sup>數躡耳列夫屋耳說古掘久尹迭といひ和漢に所謂の命理占候の天學の主どる處なり<sup>つかさ</sup>22。

ここにおける「天学語のアストロローシヤ」と「和蘭語スタルレホールセクケキユンデ」とは、ラテン語「Astrologia」とオランダ語「Sterrenkunde」<sup>23</sup>という占星術のことである。吉野が指摘したように、七曜日は占星術の一環、「命理占候の天学」として、本木良永に取り上げられた<sup>24</sup>。上の引用文によれば、西洋の七曜日は今日の単純な時間単位だけでなく、吉凶を占うための暦誌と見なされており、日中両国の七曜日と同じ性質を具有したものである。

七曜の順序について、両資料の間に矛盾がある。より正確に言えば、『天地二球用法』の順（土、木、火、日、金、水、曜）は正しいが、『新制』の「例言」に記された「日金水月土木火」という「七曜の廻りの順列」は本来の姿ではなく、ユダヤ教・キリスト教の用法との交渉により定着した日曜日から始める順序に付会したものかもしれない。

以上のように、七曜日及びその基本原理が本木良永によって、西洋の天文学（占星術）・暦学の概念として再び日本に導入された。

### 3.2 前野良沢の『和蘭訳筌』と『七曜直日考』

前野良沢も最も早く西洋の七曜日を受容した日本人学者の一人である。そのオランダ語彙集『和蘭訳筌』（1785）<sup>25</sup>（「本編・言類」）には、

<sup>22</sup> 「和解例言（草稿）」、三枝博音編『天文・物理學家の自然観』、356-357頁。

<sup>23</sup> 原語は「Starrenkunde」という旧スペルであるが、良永の転写「數躡耳列夫屋耳說古掘久尹迭」は原文に見えず、別に根拠があるのか、間違いであるか未詳である。ある学者は「Sterren」（星）とKunde（学）の間に、占うの意味「waarzeggen」あるいは「voorspelem」を入れ込んだのではないかと指摘している（吉野政治『蘭書訳述語考義』、125頁）。

<sup>24</sup> 吉野政治『蘭書訳述語考義』、108-110頁。

<sup>25</sup> 写本、早稲田大学図書館所蔵、松村明の校注版があり、沼田次郎、松村明、佐藤昌介（1976）『洋学上』（日本思想大系64）、東京：岩波書店、89-126頁を参照。

De zeeven dagen der Weeken. Zondag, Maandag, Dingsdag, Woensdag, Donderdag, Vrydag, Zaturdag.

とある。七曜日及び各曜日の名称（日・月・火・水・木・金・土曜日の順に並ぶ）は、原語のまま並べられている。しかし、訳語を集めた「本編・訳言類」には、七曜日に対応した訳名や解説などは見られない。但し、他の語彙と比べると、七曜日は孤立したものではなく、七曜（土・木・火・日・金・水・月曜の順に並ぶ）、「歳之四時」（四季）、「歳之十二月」、「十二宮」（星座）、七金属（4.4節で論説する）などの単語と共に受け入れられたことが分かる。即ち、七曜日は西洋の天文・時間概念として受容されたと思われる。

前野の本格的な考案が反映された資料は『七曜直日考』（1792）であろう。この作品は、いわゆる「和蘭書勃逸志」の中の「week」という項<sup>26</sup>から編訳されたものである。七曜日の起源説について、天文と宗教の両方の説として説明しているが、上述したようにキリスト教の要素が排除されている。一方、天文起源説については、以下のように紹介されている。

<sup>ジロバツソイス</sup>徐琰綏思（西人名）曰、七値日ハ古昔扈入多國ノ人ヨリ起ル者ナリト。即毎日七曜ノ名ヲ以テ、コレニ分属シテ、日次の称トス。蓋謂七曜ハ世界万物万事ノ政ヲ執ルモノナレハナリ。其法ハ一昼夜ヲ二十四時ニ分テ、七曜各次ヲ逐テ、每一時ヲ司ル。凡前夜子ノ正刻ヲ以テ、第一時トシ、第一ノ星曜ヲコレニ直テ以テ其日の名トス。其序次左ノ如シ、土曜、木曜、火曜、日曜、金曜、水曜、月曜ナリ。然七直日ノ次ハ日曜ヲ初トス、是其前日ノ土曜ヨリコレヲ傳ルモノナリ。次二月曜、火曜、水曜、木曜、金曜及ヒ土曜、コレニ受テ終テ復初ルナリ<sup>27</sup>。

<sup>ジロバツソイス</sup>徐琰綏思（Dio Cassius）という人物は、古代ローマの政治家、歴史学

<sup>26</sup> Buys, Egbert. (1778). *Nieuw en Volkomen Woordenboek van Konsten en Weetenschappen* (Vol. X), Amsterdam: S. F. Baalde, pp. 789-790.

<sup>27</sup> 句読点は筆者による、以下同じ。

者カッシウス・ディオ（Cassius Dio）である。原作者 Buys の引用したディオの作品『ローマ史』（*Historia Romana*, XXXVII）には七曜日のエジプト起源説が記されている。この説によると、紀日としての七曜日はエジプト（「厩入多」）に起源を発するようである。では、なぜエジプト起源説があるのかというと、元々、七曜日はバビロンで起こった占星術の一部であり、ヘレニズムの頃、エジプトで初めて紀時、さらに紀日の方法として考案され、その後広く流布した概念であるためである<sup>28</sup>。その原理は、前節で論じた本木良永の説とほぼ同一である。

翻訳のほか、前野はさらに工夫を加え、日中両国における伝統文化を参照しつつ案文を書き下ろした。案文については、以下の三点を説明したい。

第一に、洋の東西の七曜日が同じである点。前野は「曆術ヲ学ハサレハ、未コレヲ知ラス」と述べるが、七曜日は日中両国にあるもの（「直日ノ起原、吾邦及支那其由テ来ル所ノ説アルヘシ」、「凡西曆ハ、七曜ノ纏躰近遠合衝等ヲ記ス、即吾邦七曜曆ト称スル者、コレニ類ス」）だけでなく、用途（「彼邦往古ヨリ、コレニ依テ事務祭祀例式ノ與カル所アリ。又星命吉凶等ノ属スル所ノ用アリ、即支那時日ニ干支五行ヲ配シテ、事物等ヲ論スルノ意ト同キナリ」）も、曜日（「吾邦ノ曆日ト西洋ノ曆日ト、年次相當セル者ヲ以テ、試ニ其値日ヲ校スルニ、各日各曜恰モ相適合ス」）も同じであると論じている（両者の関係については、3.3節で検討する）。

第二に、日曜日から始まる点。前野は「太陽ハ万光ノ本原ナルヲ以テナルヘシ」と推測した。本当の理由については触れていないが、当時の日本人に分かりやすい説明を与えたと考えられる。

第三に、循環往復の点。尾を食った蛇のような七曜日の特徴について、前野は「西曆七曜ヲ以テ日次ニ配シテ毎日ノ名トスル者、支那ニテ干支ヲ以テスルカ如シ」と論じ、干支の概念をもって、理解・説明している。

以上のように、前野はオランダ語文献を通じ、伝統文化に基づき七曜日についての認識を進めていった。前野の天文曆法に関する素養は必ずしも高いとは言えないが、西洋の七曜日の概念を認識・理解する過程で、日中

両国における基礎的な天文学・暦学の知識の役割は小さくないと言える。

### 3.3 吉雄俊蔵の『遠西観象図説』

前野良沢に続き、蘭学者吉雄俊蔵（1787-1843）は『遠西観象図説』（1823年、角書付書名『理学入式遠西観象図説』）の中で、七曜日を暦学の理論として取り扱っている。この作品は何冊かのオランダ語の自然科学書に基づき、編訳された作品であるが<sup>29</sup>、「七曜日」の一節は訳文というより、考案と見たほうが良い。この部分において、吉雄は主に日本の七曜の紀日法を考察した上で、西洋の七曜日との一致性を論じた。

七曜の紀日法について、吉雄は以下のように述べている。

皇國ノ曆ニハ、日ヲ干支ニ配スルノミナラズ、七曜ヲ以テ日ニ配シ。毎朔日ノ本曜ヲ其月名ノ下ニ記ス。タトヘバ、今年ノ曆ニハ正月ノ下ニ「土曜値朔日」トアリ、二月以下ハ略シテ「日よう、火よう」ナド記セリ、皆コレ其朔日ノ本曜ニモ正月元旦「土曜日」ナレハ、二日「日曜日」（中略）七日「金曜日」ニモ八日ハ必ず朔ノ本曜ニ復ス。（日、月、火、水、木、金、土、コレヲ七曜ノ順次トス、必ず八ヲ以テ其本曜ニ復スルナリ）此ノ如クナレバ、八日、十五日、二十二日、二十九日ニ本曜ニ復ス（歌ニ一と八、十五、二十二、二十九ハ七ツの曜の一めぐりなりト云フヲ記憶スベシ、コレヲ七曜循環ノ歌ト云フ）<sup>30</sup>

吉雄によると、日本の曆には、干支の紀日法のみならず、「七曜ヲ以テ日ヲ配シ」、即ち七曜の紀日法があるとされる。具体的な扱い方は、毎月一日にくる七曜の中の一つの曜より、曆書に当月の下に「～曜値朔日」、「～よう」（曜）と記されていることである<sup>31</sup>。また、七曜の順序が今と同じく、

<sup>29</sup> 広瀬秀雄、中山茂、小川鼎三（1972）。『洋学 下』（日本思想大系 65）、東京：岩波書店、467-468 頁。

<sup>30</sup> 吉雄俊蔵口授、草野養準筆記（1823）。『遠西観象圖説』、名古屋：観象塾、巻中、45-46 頁。

<sup>31</sup> 「値／直」とは、旧曆時代の概念であり、「あう」の意味である（内田正男『暦と時の事典』、1 頁）。

<sup>28</sup> リオフランク・ホルフォード-ストレブズ『暦と時間の歴史』、101-103 頁。

日から土まで一並びに循環している。

特に注意したい点は、吉雄が言及する「一と八、十五、二十二、二十九ハ七ツの曜の一めぐりなり」という「七曜循環ノ歌」である。この歌の存在により、当時の日本人にとって、七曜日は見知らぬものではないということが証明できるであろう。

勿論、その当時広く利用された暦は太陰太陽暦であり、一ヶ月は30日(大)と29日(小)の二種類があり、吉雄は上文の解釈の後に引き続き以下のような補足をしている。

故ニ當月小盡ナル寸ハ、來月ノ朔ハ當朔本曜ノ次ニ當ル。即チ正月小盡ナル故ニ、二月朔ハ日曜ニ當リ(土曜ノ次日曜ナリ)當月大盡ナル寸ハ、來月ノ朔ハ當朔本曜ノ次ノ次ニ當ル。即チ二月大盡ナル故ニ、三月朔ハ火曜ニ當レリ。(日曜ノ次ノ次ハ火曜ナリ)<sup>32</sup>

以下のように西洋の七曜日にも論及している。

西洋の暦ハ、日ニ干支を配スルヲナシト雖トモ、但七曜ヲ配スルヲノミ、皇國ノ暦ニ同ジクシテ、且ツ其當日モ亦互ニ符合セリ。タトヘバ文政四年二月朔ハ吾曆ニテ日曜日ニ當ル、彼邦ノ曆ニテモ日曜日ニテ當レリ。但其曆法同ジカラザルユエニ、彼邦ニテハ當日ヲ三月四日トスルナリ、以下ニ載スル所ノ諸法ニ據ル寸ハ皇國當月當日ハ彼邦ノ某月某日に當ルト云フヲ知るニ毫モ差フヲナシ<sup>33</sup>。(後略)

西洋の暦には干支はないが、七曜日はあり、対応する日も同一である。例として、吉雄は日本の文政4年2月1日と、これに対応する西暦1821年3月4日の曜日を比べ、同じ日曜日であることを確認している。

但し、多くの研究者は、『宿曜経』や七曜暦などは吉凶を占うための暦

注であり、現在の七曜日と異なると主張する<sup>34</sup>。その説はある程度正しいが、七曜をもって、紀日法とする共通点(第八品「夫七曜者。所謂日月五星下直人間。一日一易七日周而復始<sup>35</sup>」)、また西洋における占星術の性質を具した七曜日の側面などが見落とされている。

また、洋の東西において、七曜日が同じ日に対応することが確認されている。上述した吉雄の考案も偶然のことではない。筆者は『貞享暦』(貞享二年、「正月小[中略]日曜值朔日」、西暦1685年2月4日;享保十四年、「正月大[中略]土曜值朔日」、西暦1729年1月29日)、『宝暦暦』(宝暦五年、「正月大[中略]月曜值朔日」、西暦1755年2月11日)、『寛政暦』(寛政十年、「正月小[中略]金曜值朔日」、西暦1798年2月16日;吉雄俊蔵が論述した文政四年の暦書『三嶋暦』、「正月小[中略]土曜值朔日」、西暦1821年3月4日)に記された曜日をそれぞれチェックし、貞享改暦(1685年)以降の記録は西洋の曜日と一致することを確認した<sup>36</sup>。その中の『寛政暦』は西洋の天文学を取り入れた暦法である。一方、これより早くに成立した『貞享暦』、『宝暦暦』は伝統的な和暦であり、七曜日の推算及びその利用に対し、どのような西暦の影響があるのかは未だ不明である。

江戸時代に限らず、平安時代(794-1185)の資料『続日本紀』(797)天平二年(730)三月辛亥の条、『延喜式』(905-927)の卷十六などにも七曜暦の伝習、進献のような関連記録が残されている。それらの七曜暦は現在では見られないが、『御堂関白記』(998-1021)などの史料にも七曜日の記録が確認できる。『御堂関白記』に書かれている曜日(例えば、寛弘4年8月10日の条に「火(曜)」と記入され、対応する西暦は1007年9月23日)も正しく、今日の七曜日と連続していることが確かめられる<sup>37</sup>。資料間の繋がりが及び根拠ははっきりしないが、七曜日の存在とその一致性は明白な事実である。

<sup>34</sup> 内田正男『暦と時の事典』、122頁。

<sup>35</sup> 中華電子佛典協會(2014)、『CBETA電子佛典集成』、臺灣:中華電子佛典協會、T21, no. 1299, p.0398a28-29.

<sup>36</sup> 『古暦帖 寛文九(1669)~明治五(1872)上』(立国会図書館蔵);『貞享暦』(享保十四年(1729))(国立科学博物館蔵);『宝暦暦』(宝暦五年(1755))(国立科学博物館蔵);『寛政暦』(寛政十年[1798])(国立科学博物館蔵);『三嶋暦 文化十四年(1811)~文政九年(1867)』(国立国会図書館蔵)。

<sup>37</sup> 内田正男(1975)、『日本暦日原典』、東京:雄山閣、504頁、510頁。

<sup>32</sup> 吉雄俊蔵『遠西観象圖説』、巻中、46-47頁。

<sup>33</sup> 同上、47頁。

### 3.4 宇田川玄隨の『蘭学秘蔵』と宇田川榕庵の『点類通考』

前野良沢らとの交流を通じ、蘭医へと転向した津山藩（現、岡山県津山市）医官の宇田川玄隨（1756-1798）及び三代目の宇田川榕庵（1798-1846）も七曜日について触れている。宇田川玄隨は吉雄俊蔵より早く七曜日に言及したようであるが、関連作品『蘭学秘蔵』の成立年代は不詳であり、学理の検討も弱いため、ここでは宇田川榕庵と共に考察する。

『蘭学秘蔵』（甲集、写本、早稲田大学図書館所蔵）には以下のようにある。

龍橋ノ源公（朽木隠岐守）十二月ノ蘭名ヲ歌括トス及ヒ七値ヲナヘニ  
 |ヤニューレイ ヘブリユ マールト アツプリル マートユー子イ  
 コレデ春夏、秋ユレイ アウクステュス セプテムブ ヲクト ノー  
 ヘム デセムベル冬、ソン マーン ジング スウーン ドンドル  
 (ヨ) フレイ サテュールコレゾ七値、ヤ、諳記シヤスシ

龍橋の源公（朽木隠岐守）、即ち、蘭癖大名、丹波国福知山藩（今、京都府福知山市）の第8代藩主朽木昌綱（1750-1802）は、十二か月の呼称の後に七曜日のオランダ名を続けて記す。この部分は「月名七値歌」とも呼ばれる。この歌が成立した具体的な年代や流布状況などは不明であるが、七曜日はオランダ語・西洋文化における学習の一環として、当時の学者の間で学ばれ、認識されていたと推測できる。

七曜日については、宇田川榕庵も実際に使用していたことに目を惹かれる。『点類通考』（1824年、写本、早稲田大学図書館所蔵）の「凡例」の終わりに、「文政七年閏八月木曜日燈下榕菴誌」という落款があり、年月の後、何日の代わりに、「木曜日」と記されている。この点について、杉本は「当時は1週間といふ生活の単位もなければ、〈曜日〉ということ自体、単に蘭書に記された閑文字にすぎなかったであろう。ことはわずか3文字であるが、ここには榕庵のヨーロッパ学問への近接と、彼の対ヨーロッパ学の態度が象徴的に示されているといっても過言ではあるまい。あるいは日曜日を独り休んで、1週7日間を生活単位とするヨーロッパの生活を夢見た

かもしれない」と指摘する<sup>38</sup>。大げさな表現かもしれないが、宇田川玄隨の「月名七値歌」と比べると、蘭学者のエキゾチシズムの一つであると言える。

「月名七値歌」であれ、「木曜日燈下」であれ、理論の検討とまではいかないが、蘭学者の間では、西暦の元旦を祝う「新元会」のように、七曜日を時間単位として取り扱ったエキゾチシズムが存在したと考えられる。

総合的に見れば、蘭学時代以降、七曜日は西洋文化の一環として再び日本に輸入された。しかし、前野良沢や吉雄俊蔵などの蘭学者にとっては、完全な新概念ではないと考えられる。彼らはそれぞれに七曜暦などの伝統文化を参考にしながら、両者の同一性を認識した。また、曜日の順序については、伝統的な七曜日も西洋の七曜日も、同じく日曜日から始まると思われる。

## 4 語誌の考察

以上は主に宗教と天文学（暦学）の両方面から検討したが、以下、語誌の視点から七曜日における伝統から近代への軌跡を遡ってみたい。

上文で検討したように、七曜日という概念は既に中国の古代典籍に存在していることが確認できる。これがインドからの伝来であるのか、中国オリジナルの発想であるのかは、複雑であり、未だに定論がない問題であるためここでは省略する。しかし、平安・江戸時代の日本では、漢訳仏典、曆書などの資料が見られる。

『宿曜経<sup>39</sup>』などの仏典には「七曜直日」という総称のみならず、各曜日の名称「太陽・太陰・火曜・水曜・木曜・金曜・土曜直日」や「太陽・太陰・熒惑・辰星・歳星・太白・鎮星直日」などの用語（第四、第八品）も記されている。また、七曜について、意識あるいは解説語のほか、胡（ソグド語 Sogdian）・波斯（古典ペルシア語 Pehlvi）・天竺（梵語 Sanskrit）

<sup>38</sup> 杉本つとむ（1977）『江戸時代蘭語学の成立とその展開』（II）、東京：早稲田大学出版社、909頁。

<sup>39</sup> 『宿曜経』の内容はインド占星術そのものであり、仏教の教理とはおよそ無関係であろう。矢野道雄（1991）『密教占星術：宿曜道とインド占星術』、東京：東京美術、4頁。



名の音訳語も並んでいる（第八品）<sup>40</sup>。それらの音訳語は敦煌文献<sup>41</sup>、『御堂関白記』などの資料にも記されている。

「具注曆日」の一環として、『御堂関白記』には七曜日も記入されている。資料の中で、日の上に「日・月・火・水・木・土（曜）」と七曜の名が記されている。江戸時代の貞享改暦以降の曆書には「～曜値朔日」、「～よう」（曜）という記録が確認できる。

伝統的な言い方は以上のものであるが、西洋文化の影響を受けてからはどうであろうか。

#### 4.1 『羅葡日対訳辞書』の訳語

前文（「2 キリスト教の要素と排除」）で『羅葡日対訳辞書』の訳語を簡単に紹介する。総名「xichinichi, nanuca」（七日）のほか、毎日の名称も見られる。

Dies, ei. Lus. Dia. Iap. Fi（中略）Dies Solis, l, Phoebi. Lus. Domingo. Iap. Domingono fi.

|| Dies Lunae. Lus. Segunda feira. Iap. Segundano fi.

|| Dies Martis. Lus. Terça feira. Iap. Terçano fi.

|| Dies Mercurij. Lus. Quarta feira. Iap. Quartano fi.

|| Dies Iouis. Lus. Quinta feira. Iap. Quintano fi.

|| Dies Veneris. Lus. Sexta feira. Iap. Sextano fi.

|| Dies Saturni. Lus. Sabbado. Iap. Sabbadono fi.<sup>42</sup>

前文（「2 キリスト教の要素と排除」）で論じたように、ここには七曜に基づいたラテン語、さらにユダヤ教・キリスト教に因んだポルトガル語があるが、日本語の訳名は後者からのものである。厳密に言えば、完全な

<sup>40</sup> 中華電子佛典協會『CBETA 電子佛典集成』、T21, no. 1299, pp. 0391c06-0392b02, 0398a27-0399c18.

<sup>41</sup> ポール・ペリオ、羽田亨編（1926）。「七曜曆日」、『燉煌遺書』（影印本第一集）、上海：東亞研究會。

<sup>42</sup> 勉誠『羅葡日対訳辞書』、209-210頁。

訳語ではなく、ただ原語或いは語幹に「no fi」（の日）という語尾がつけられた訳語である。

#### 4.2 本木良永の訳語

『天地二球用法』と『新制』の中に見られる本木良永の訳名は下表の通りである。

本木良永の訳名表

オランダ語名	訳名	
	『天地二球用法』	『新制』
Week	一	七曜の日
Zondag	日曜日	太陽日
Maandag	月曜日	太陰日
Dingsdag	火曜日	
Woensdag	水曜日	
Donderdag	木曜日	
Vrydag	金曜日	
Zaturdag	土曜日	

一見すれば、「Zon」、「Maan」、「dag」などの単語はそれぞれ「日曜」（太陽）、「月曜」（太陰）、「日」という意味と対応していることから、訳語は語意から直接作られたように思われるが、そう単純ではない。北欧神話に由来するオランダ語の七曜日の名称の意味と完全に対応するものは日曜日、月曜日、土曜日（「Zaturdag」と「Zaturnus 土星」は同一語源を有する）のみであることから、これら三語は語意に基づいた訳語である。一方、火（Dingsdag）・水（Woensdag）・木（Donderdag）・金曜日（Vrydag）など四つの名称は北欧神話の諸神（それぞれに軍神 Týr<sup>43</sup>、戦争の神 Wodan、雷神 Donder、豊穡の女神 Freyr<sup>44</sup>）に由来しており、意味上の対

<sup>43</sup> 軍神 Týr（火）が起源とされる説や、ding（事柄）という言葉からの起源説もある。

<sup>44</sup> 一説に Frigg とされる。

応はないと思われる。「～曜日」が翻訳であれば、「week」の訳語が「七曜の日」とされたのは、七曜の関連性が大きいためであろう。

七曜の翻訳について、本木良永は次のように説明している。

この書の和解に七曜の名目、和蘭人の言語を本として七曜の總名を、  
讀瓦而・數踢耳楞といふ言語を以て、書中に惑星又は惑者と譯するなり。過つて熒惑星と混ずべからず。日月五星の名目は、和蘭人陰陽を辨せざれども和漢の名義に隨ひ、日月を太陽太陰と譯し、五星の名目は固より和蘭人、木火土金水、の五行を辨ぜずと雖も便利なるを以て、辰星を水星と譯し、太白星を金星と譯し、熒惑星を火星と譯し、歳星を木星と譯し、鎮星を土星と譯するなり<sup>45</sup>。

つまり、日月五星の訳名が語意面の対応ではなく、便利さから、陰陽五行の伝統的思想に従い翻訳されている。もちろん、本木良永の訳語は新しい語彙ではなく、古代の書籍に見られるものである。「～星日」を使用しない理由は、「七曜」の影響が強いためと思われる。

また、初期から現在のような言い方が成立している。『新制』に至り、少し変化があったという点から見れば、訳語は未だ定着していなかったと言える。

### 4.3 前野良沢の不完全な訳語とその問題

『七曜直日考』において、前野良沢は七曜日の起源を紹介するだけでなく、訳名にも工夫を加えている。

「week」の訳語として、タイトルと「七曜直日」のほか、本文には「七直／値日」、「直／値日」も見られる。具体的な名称に対する訳文には七曜の名をもって、各曜日を仮称している。専門用語はないが、案文の表には「土曜日」、「日曜日」、「月曜日」という訳名も見られる。他の四つの曜日名には「～日」が見えず、「～曜」の仮称として使用するための代用語と考えられていたのかもしれない。

<sup>45</sup> 三枝博音編『天文・物理學家の自然観』、344頁。

この不完全な訳語は、前野の弟子たちに至っても継承されている。孫弟子の一人、稲村三伯(1758-1811)は、長崎通詞の石川恒左衛門(生卒未詳)などの協力の下で『波留麻和解』(1796)という膨大なオランダ語辞書を編纂した<sup>46</sup>。この辞書は七曜日関係のオランダ語の単語及び日本語訳を収録している。「week」は「七曜日」、日・月・火・木・金の五つを現在でも使用している「～曜日」と翻訳しているが、木・土曜日の條では、「七曜日の一(日)」という説明文のみで、対応する訳名は見られない。

また、藤林普三(1781-1836)によって編纂された『波留麻和解』の簡約版『訳鍵』の中では、「week」が「七値」とされ、日・月・火・木・金の五つの訳名を稲村訳からそのまま継承している。稲村では翻訳されなかった二項に対して、藤林は「Woensdag」(木曜日)を「土曜日」と訳し、「Zaterdag」(土曜日)を「七値ノ一」とした。前者は間違いであり、後者は稲村の「七曜日」を「七値」にしたと思われる<sup>47</sup>。

未訳と誤訳については、上述したように、語意の不对応によってもたらされた問題であろう。従って、訳語の面では、今日広く使われる「～曜日」が完全に定着しなかった。

### 4.4 宇田川玄隨の訳語

『蘭学秘蔵』に見るオランダ語・西洋文化の一つとして認識された七曜日に対し、宇田川玄隨も類似の訳語を作り出した。その乙集によると、

- 1 zondag (sol) goud 大陽 黄金 日 ☉
- 2 maan- (luna) zilver 大陰 銀 月 ☾
- 3 dings- (mars) ijzer 熒惑 鐵 火星 ♀
- 4 woens- (mercurius) tin 辰星 水銀 水星 ♁
- 5 donder- (jupiter) 歳 錫 木星 ♃

<sup>46</sup> 松村明の影印版を参照。松村明監修(1997)、『近世蘭語資料第1期 波留麻和解』、東京：ゆまに書房。稲村三伯とその辞書の編纂について、杉田玄白『蘭学事始』(1815)には関連した記述が見られる。

<sup>47</sup> [藤林普山] (年代不明)『訳鍵』(刊本)、[地点、出版者未詳] (関西大学図書館所蔵)。

- 6 vry- (venus) 大白 銅 金星 ♀  
 7 zatur- (saturnus) 鎮 鉛 土星 ♁

とある。七曜日に対応した金属（後の三者はオランダ語を欠く）、天体と天文学の記号が見られる。ここで、宇田川玄随は如何なる説明も加えず「太陽・大陰・熒惑・辰星・歳・大白・鎮」などの伝統的な天文用語で七曜日を示している。また、古代西洋では、金、銀、鉄、水銀、錫、銅、鉛などの七つの金属は七金属とされた。錬金術と占星術の交渉によって、七金属と七曜・七曜日との対応という考え方が形成された。前野良沢（3.2節）と同様、宇田川玄随も類似の影響を受けたと考えられる。

また、文末には「Week 七日ヲウエーキト云右ハ干支ノ如キモノニテ循環ノ端ナク数フ」という説明があり、七曜日を干支と類比し、循環して数えるという特徴を解説している<sup>48</sup>。

但し、宇田川玄随にとって、『蘭学秘蔵』のやり方が唯一の訳語ではないと思われる。杉本つとむの調査によると、宇田川玄随口授、受業生筆記の『蘭説弁髦』（東京大学所蔵）では「女曜日」とあり、語源を知った上で訳した可能性が大きいことが明らかにされている<sup>49</sup>。

前野良沢などが七曜日を七曜と対照して考察したのに対して、宇田川玄随はより明確に時間単位として、またオランダ語源の視点からの認識を試みていると言える。

#### 4.5 森島中良、吉雄俊蔵などの訳語

18世紀の末には、さらにもう一冊の蘭日語彙辞書が刊行された。それは森島中良（1756-1810）の『類聚紅毛語訳』（1798）である。ここにも七曜日のオランダ名（片仮名）と漢訳名が収録されている。森島は「セーヘンウエイキ」（zeven week）を「七値」と訳している。但し、各曜日の訳名にはいずれも「日」という文字がなく、各曜日と対応した金属を用いる。注意すべき点は、これらの単語は単純な言葉として認識されたわけではなく、

<sup>48</sup> この点について、前野良沢も『七曜直日考』の中で言及した。

<sup>49</sup> 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』（II）、753頁。

「時令」の一部として、四季や月などの言い方と一緒に編纂されたことである。

日本に大きな影響を与えた作品と言えば、吉雄俊蔵の『遠西観象図説』であろう。前文（3.3節）で論じた「七曜日」のほかに、原語と訳語の対応表がある。

吉雄俊蔵の訳名表<sup>50</sup>

オランダ語名	転写	訳名
Zeven dagen der week	セーヘン、ダーゲン、デル、ウェーキ	七曜日
Zondag	ゾングダ	日曜日
Maandag	マーン、ダグ	月曜日
Dingsdag	デングス、ダグ	火曜日
Woensdag	ウーンズ、ダグ	水曜日
Donderdag	ドンドル、ダグ	木曜日
Vrydag	フレイ、ダグ	金曜日
Zaturdag	サチュル、ダグ	土曜日

上表に示されているように、吉雄俊蔵の訳語は現在使用されている名称と完全に一致する。本木良永や前野良沢と同様、吉雄俊蔵もそれらの北欧神話によるオランダ語を翻訳した際、語意・語源面の考察と言うより、元々の由来——七曜の知識を利用したほうが良いと考えたのであろう。

その後、宇田川榕庵の『蘭学重宝記』（1835年、角書付書名『翻訳必携蘭学重宝記』）で使われた言葉は現在と完全に同じである<sup>51</sup>。しかし、来日したオランダ人は、まだ定まった用語として使用していなかったようだ。たとえば、通詞の協力を受けた上で、ゾーフ（Hendrik Doeff, 1777-1835）によって編訳されたオランダ語日本語辞書、いわゆる『道訳法児馬』（1833）では、「woensdag」を「水ノ曜日」、「week」を「メクリノ日数」と訳している<sup>52</sup>。

<sup>50</sup> 当表は「国字類音観象名目」（巻上23-44頁）より製作した。

<sup>51</sup> 賀壽麻呂大人〔宇田川榕庵〕著、篤麻呂大人〔シーボルト?〕校（1835）。『蘭学重宝記』（観自在樓蔵梓）。

<sup>52</sup> 松村明監修（1998）。『近世蘭語資料第III期 道訳法児馬』、東京：ゆまに書房。

#### 4.6 英語、フランス語からの訳名及び「週」の概念について

周知のとおり、黒船来航以降、日本はアメリカなどの欧米諸国と正式な外交関係を結んだ。福沢諭吉（1835-1901）など多くの蘭学者が英語の勉強を始め、蘭学から英学へと転換した。より厳密に言えば、その転換は1810年代から既に始まっており、英語のみならず、フランス語などの学習も行われていたため、英学というよりは洋学へ変化したと見なすほうが良い。学者たちは蘭学以外の視点から西洋の七曜日に対する認識を深めていった。

フェートン（Phaeton）号事件（1808年10月、イギリス軍艦が長崎に侵入）をきっかけとして、1809年、本木正栄（1767-1822）などの長崎オランダ通詞は幕府の命令を受け、オランダ人から英語やフランス語などを学び始める。正栄らの学習成果は、二年後に十巻からなる『諳厄利亞興学小筈』（1811）という英和単語・短文・対話集、さらに五年後には十五巻からなる『諳厄利亞語林大成』（1814）という英和辞書、及び『拂郎察辞範』（年代未詳）という四編の仏和発音・単語・会話集などからなる三部の作品として献上された。これらの文献にも七曜日関係の言葉が見られる。総称の「week」（フランス語「la semaine」）を七値日・七曜日・値日とし、各曜日の名称を現在でも使用している「～曜日」とする。語彙の類別によって編集された『諳厄利亞興学小筈』と『拂郎察辞範』の二作品の中で七曜日は「時候部」と「時の部」に収録されている。一方、『諳厄利亞語林大成』と『拂郎察辞範』の一部には、対応するオランダ語が掲載されている。ここからも英語・フランス語を学習する際にオランダ語を仲介としていたことが明らかである<sup>53</sup>。

開国以降、英学は大きな発展を遂げた。オランダ通詞出身であった堀達之助は、『英和对訳袖珍辞書』（1862）という英和辞典を編纂・出版した。また、前文で論じた米国人宣教師ヘボンも明治維新の前後に三版の『和英語林集成』（1867, 1872 & 1886）を出版した。七曜日について、両氏の考案の中で注意が必要な点は「週」の概念である。

『易経』には「七日来復」とあり、『素問』には「七曜周旋」と見られるが、

<sup>53</sup> 日本英学史料刊行会編（1982）『諳厄利亞興学小筈』（長崎原本影印）、東京：大修館書店；同（1982）『諳厄利亞語林大成』（長崎原本影印）、東京：大修館書店；本木正栄（？）『拂郎察辞範』（写本、市立長崎博物館所蔵、早稲田大学図書館複製版）。

気の往復循環または天体の運動という意味で、七日間を一週とする概念であるとは言い難い。但し、「週」という漢字は、確かに『字彙』に見られるように「廻る」という意味で使用されている。江戸時代の日本では、「廻り」は一つの時間単位として、12年（干支の十二支から）のほか、湯治や服薬療法などの日数について、通常、七日を一期として、一廻りとも言われていた（『日本国語大辞典』第二版）。今の資料から見れば、明確に七曜日の七日を「週」あるいは「廻り」と対応して使用し始めた学者は両氏であろう。『英和对訳袖珍辞書』には、

Week 七曜 一ト周りノ日數  
Weekly 一週毎ニ  
Monday 月曜日（一週ノ第二日）<sup>54</sup>

とあり、英語の「week」を「七曜」と訳すだけでなく、一回りの日数または「一週」と訳す。一方、『和英語林集成』（「英和の部」）の解説では以下の通りである。

WEEK, Mawari (1867, p. 129L)  
WEEK, n. Mawari, isshū (1872, p. 196R)  
WEEK, n. Mawari, isshū, isshūkan (1886, 958L)

ヘボンは初版で「廻り」（Mawari）（「A period of seven days, (in taking medicine.)」（「和英の部」1867, p. 261）という用語を用い、「week」の訳語としたが、その後、「一週」（isshū）や「一週間」（isshūkan）という言い方を加えた。両氏の訳語にどのような関係があるのか詳細については不明であり、蘭学資料にも見られないが、七曜日を「一週（間）」とする考え方は両氏の時代が起源であろう。

<sup>54</sup> 堀達之助編（1862）『英和对訳袖珍辞書』、江戸：[徳川幕府洋書調所]（複製版、東京：秀山社、1973年）。

一言でいえば、現在使われている「七曜日」、「～曜日」などの言い方は単純な訳語ではなく、伝統的な七曜（直日）などの言い方の上に、様々な学者によって改変された言葉であると思われる。その過程では、ポルトガル語を始め、ユダヤ・キリスト教による名称が一時取り入れられたが、その後は断絶してしまった。蘭学者は主に北欧神話による七曜日の語彙に向かうが、訳語を定めた際、語源にはあまり触れず、ラテン語、天文・占星学（暦学）、日中両国の伝統文化にある七曜の知識を利用していたと考えられる。

また、曜日を表す「～曜」は常に「～曜日」の略語と見なされるが、前者は後者より早く成立したと思われる。語尾の「日」はオランダ語の「dag」（英語「day」）の訳語「～（の）日」、或いは「～曜直／値日」から訳出された故に、その発音は「じつ」や「にち」などの音読みより、「び」という音便形の読み方が一般的なのであろう。

## 5 普及

七曜日が一般の日本人に広く知られるようになったのは福沢諭吉の『改暦辨』によるとと思われる。維新以降、政府は明治五年十一月九日（西暦1872年12月9日）太政官布告第三百三十七号改暦の布告を頒布し、「自今舊曆ヲ廢シ太陽曆ヲ用ヒ天下永世之ヲ遵行セシメン」とし、新暦の年、月、日および時刻について説明した<sup>55</sup>。しかし、福沢諭吉は「抑も一國の暦日を變ずるが如きは無上の大事件にして（中略）政府の布告文を見れば簡單至極にして其詳なるを知るに由なし」と感じたため、『改暦弁』を創作した<sup>56</sup>。そして、1873年に出版されると広く読まれた。『改暦弁』は、西暦が便宜とされた原理を詳しく解説しただけでなく、時間単位も紹介している。その中で一番に紹介されたのが七曜日である。「ウキキの日の名」には、

西洋にてハ一七日を一ウキキと名づけ、世間日用の事大抵、一ウキキにて勘定せり。譬へバ、日雇賃にても借家賃にても、其の外、物の賃

<sup>55</sup> 内閣官報局（1889）、『法令全書』（明治五年）、東京：長尾景弼、231-232頁。

<sup>56</sup> 福澤諭吉（1897）、『福澤全集緒言』、東京：時事新報社、102-103頁。

借約束の日限、皆何れも一ウキキに付、何程とて一七日毎に切を付ること。我邦にて毎月晦日を限にするが如し<sup>57</sup>。

とあり、「week」という概念を紹介し、具体的な使用を説明した。また、英語の七曜日の言い方を片仮名で表記し、対応する日本語を付した。

その後、明治九年（1876）、太政官達第二十七号（3月12日）によると、

従前一六日休暇ノ處來ル、四月ヨリ日曜日ヲ以テ休暇ト被定候條、此旨相達候事。但、土曜日ハ正午十二時ヨリ、休暇タルヘキ事<sup>58</sup>。

とあり、日本では七曜日が時間単位として初めて正式に導入された。

## 6 おわりに

以上述べたように、現在の日常生活で使用される時間単位としての七曜日は新しいものではなく、主に蘭学時代に、『宿曜経』、七曜暦などの伝統的知識が西洋文化と交渉する過程で、時間単位として広く使用されてきたものと考えられる。蘭学者などの努力により、この概念は伝統的な占いの機能、キリスト教の要素と分離され、次第に占星、宗教などの思想を脱出し、近代的な暦の概念として普及するようになった。

後記：本稿の主要部分は2015年3月21-22日（土・日）早稲田大学で行われた国際シンポジウム「東アジアにおける漢字漢語の創出と共有」において発表したものである。指導教官である関西大学の沈国威先生ならびに北京大学の陳明先生、孫建軍先生からご指導を賜った。また、飛田良文、櫻井豪人、張哲嘉、前原あやの、二ノ宮聡、阮氏妙齡、陶磊等の諸先生から頂いた教示や資料が本稿の完成に大いに役立った。この場を借りて、感謝の意を表したい。

<sup>57</sup> 福澤諭吉（1873）、『改暦辨』、東京：和泉屋市兵衛（慶應義塾蔵版）、葉7表。

<sup>58</sup> 内閣官報局（1890）、『法令全書』（明治九年）、東京：長尾景弼、290頁。

附表：七曜日における代表的な学者の記名一覧（1595-1886）

記者	曜日	七曜日	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
『雑葡日』 (1595)		xichiniichi nanuca	Domingono fi	Segurdano fi	Tercano fi	Quartano fi	Quintano fi	Sextano fi	Sabbadono fi
本木良永 (1774)		七曜の日	日曜日 太陽日	月曜日 太陰日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
前野良沢 (1792)		De zeven Dagen der Weeken 七曜直日、 七曜直(日)	Zondag	Maandag	Dingsdag	Woensdag	Donderdag	Vrydag	Zaterdag
宇田川玄隨 (未詳)		七曜	日曜(日) 1 zondag (sol) 太陽 黄金 日 ⊙	月曜(日) 2 maan- zilver 太陰 銀 月 ☾	3 dings- (mars) iizer 炎惑 鐵 火星 ♂	4 woens- (mercurius) tin 辰星 水銀 水星 ♀	5 donder- (jupiter) 歳 錫 木星 ♃	6 vry- (venus) 太白 銅 金星 ♀ 女曜日	7 zatur (Saturnus) 鎮 鉛 土星 ♄
稻村三伯 (1796)		七曜日	zondag	maandag	dingsdag	woensdag	donderdag	vrydag	Zaterdag
森島中良 (1798)		七曜	日曜(金) ゾンダク	月曜(銀) マアソダク	火曜(鉄) デングスダク	水曜(疾) ウーンスダク	木曜(錫) ドンドルダク	金曜(銅) フレダク	Zaterdag
藤林普山 (1810)		WEE...k 七曜	ZON...dag 日曜日	MAA...ndag 月曜日	DIN...gsdag 火曜日 裁判ノ日 <sup>61</sup>	Woe...nsdag 土曜日 [ママ]	DON...derdag 木曜日	VRY...dag 金曜日	ZAT...erdag ZAT...urdag 七曜の一
本木正栄 (1811)		A week 七曜日	Sunday 日曜日	Monday 月曜日	Tuesday 火曜日	Wednesday 水曜日	Thursday 木曜日	Friday 金曜日	Saturday 土曜日
(1814)		week 七曜日(値日)	sunday zondag 日曜日	monday maandag 月曜日	Tuesday dingsdag 火曜日	wednesday 水曜日	thursday donderdag 木曜日	friday vrijdag 金曜日	zaterdag 土曜日
(?)		la Semaine	dimanche	lundi	mardi	mercredi	jeudi	vendredi	samedi

記者	曜日	七曜日	日曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
吉雄俊蔵 (1823)		セーヘン、ダー ゲン、アル、ウ エーキ 七曜日	ゾンダグ 日曜日	マン、ダグ 月曜日	デングス、ダグ 火曜日	ウーンス、ダグ 水曜日	ドンドル、ダグ 木曜日	フレイ、ダグ 金曜日	サチュル、ダグ 土曜日
ゾーフ (1833)		Week メクリノ日数	Zondag 日曜日	Maandag 月曜日二	Dinsdag 火曜日	Woensdag 水曜日	Donderdag 木曜日	Vrydag 金曜日	Zaterdag 土曜日
宇田川榕庵 (1835)		七曜日	ゾンダグ ⊙日曜日	マンダグ ⊙月曜日	デインダグ ♂火曜日	ウーンスダグ ♀水曜日	ドンドルダグ ♂木曜日	ブレイダグ ♀金曜日	サチュルダグ ♀土曜日
堀達之助 (1862)		Week 七曜 一ト周リノ日数 Weekly 一週毎ニ	Sunday 日曜日	Monday 月曜日 (一週ノ第二日)	Tuesday 火曜日	Wednesday 水曜日	Thursday 木曜日	Friday 金曜日	Saturday 土曜日
福沢諭吉 (1873)		ウキキ	サンデイ 日曜日	マンデイ 月曜日	チュウ ス デイ 火曜日	サアス デイ 水曜日	エンス デイ 木曜日	フライ デイ 金曜日	サタ デイ 土曜日
ヘボン (1867)		WEEK, Mawari.	SUNDAY, Ansoku-nichi; yasumi-bi; dontaku	MONDAY, n	TUESDAY, n	WEDNESDAY, n	THURSDAY, n	FRIDAY, n	SATURDAY, n
(1872)		n ♀ issshū.	n ♀ yasumi ♀ nichiyōbi	Getsu-yōbi	Kuwa-yōbi	Sui-yōbi	Moku-yōbi	Kin-yōbi	Doyōbi
(1886)		n ♀ Isshukan.	n ♀ ♀ ♀ ♀	Getsuyōbi	Kwakuyōbi	Suiyōbi	Mokuyōbi	Kinyōbi	Doyōbi

<sup>61</sup> 別に「DIN...gdag」という条があり、「裁判ノ日」(原文に「同上ノ日」(上の條「DINGbank 裁判處」)、「火曜日」と記されている。

## 編著者略歴

### 沈 国威 (シン コクイ)

関西大学外国語学部、外国語教育研究科教授、東西学術研究所研究員。博士（文学）、博士（文化交渉学）。専攻は外国語教育学、日中語彙対照研究。主著に『近代日中語彙交流史』（笠間書院 1994）、『遼瀋貫珍の研究』（松浦章、内田慶市氏との共編著、関西大学出版部 2004）、『近代中日語彙交流研究』（中華書局 2010）などがある。

### 内田 慶市 (うちだ けいいち)

関西大学外国語学部、東アジア文化研究科教授、東西学術研究所研究員。博士（文学）、博士（文化交渉学）。専攻は中国語学、文化交渉学。主著に『近代における東西言語文化接触の研究』（関西大学出版部 2001）、『遼瀋貫珍の研究』（松浦章、沈国威氏との共編著、関西大学出版部 2004）、『19世紀中国語の諸相—周縁資料（欧米・日本・琉球・朝鮮）からのアプローチ』（沈国威氏との共編、雄松堂出版 2007）、『文化交渉学と言語接触—中国言語学における周縁からのアプローチ』（関西大学出版部 2010）、『漢訳イソップ集』（編著、ユニウス 2014）などがある。

関西大学東西学術研究所研究叢刊 51  
(文化交渉と言語接触研究・資料叢刊 6)

## 東アジア言語接触の研究

平成 28 (2016) 年 2 月 29 日 発行

編著者 沈 国威・内田慶市

発行者 関西大学東西学術研究所  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

発行所 関西大学出版部  
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

印刷所 株式会社 遊文舎  
〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東 4-17-31

©2016 Gouwei SHEN, Keiichi UCHIDA Printed in Japan

ISBN978-4-87354-622-3 C3087 落丁・乱丁はお取替えいたします。